

# 田中貢太郎訳『聊齋志異』に関する研究

——固有の言葉、オノマトペ、時間詞について——

劉 陽

Tanaka Kotaro's translation of *Liaozhai Zhiyi*

Focusing on unique words, onomatopoeia, temporal adverb

LIU Yang

Tanaka was a great admirer of Chinese literature, especially Chinese ghost stories such as *Liaozhai Zhiyi* (聊齋志異), and he was to translate 35 of them, published as "The 12th Volume of Chinese Literature". This paper analyzes the characteristics of 10 stories from that, comparing the original work with Koda Rentaro's annotation and the translation by Shibata Temma.

Tanaka referred to Koda's annotation when translating the unique words and sources in Chinese. He generally adds interpretation instead of annotation. And Tanaka used lots of onomatopoeia to make the description more vivid. There are lots of temporal adverb with similar meaning in *Liaozhai Zhiyi*, Tanaka basically translated them into one word.

Keywords: modern Japan, Chinese Literature, Liaozhai Zhiyi, Tanaka Kotaro

キーワード：近代日本、中国文学、聊齋志異、翻訳、田中貢太郎

## はじめに

田中貢太郎は怪談作家として知られているが、中国小説、特に中国怪談の翻訳も盛んに行った。彼は幼いころから漢学に親しんでおり、高等小学校を卒業して船大工の弟子となった頃から、地元の漢学者山田収蔵（号は穀雨）に師事し漢学の勉強を始めている。彼の漢籍への素養は、この山田翁の薫陶に負うところが大きい。

その後小説家を目指して明治36年（1903）に上京し、郷土の先輩であり後に師事することになる大町桂月や田岡嶺雲、幸徳秋水ら、更には幸田露伴などと出会っている。大町桂月や田岡嶺雲らは、明治期

にあつて日本の近代的な中国文学研究の始まりに大きな役割を果たしている<sup>1)</sup>。また幸田露伴は幼少の頃から漢籍に親しんでいて、中国の文学、思想、歴史に深い関心を抱いており、伝説の仙人呂洞賓や全真教の教祖王重陽らを主人公とした「論仙」三部作（1922-1926）を著し、若い頃から愛読していた『水滸伝』の全訳（1923）を刊行し、蘇東坡と米芾をテーマとした優れたエッセイ「蘇子瞻米元章」（1926）を發表した<sup>2)</sup>。これらの人物との交流によって、田中貢太郎の漢文学への関心もより高くなったのである。

『聊齋志異』は清朝蒲松齡が創作した、中国で誰でも知っている有名な文言怪談小説集である。科挙落第生の蒲松齡は自身の理想を500篇近くのストーリーに寄せた。非現実的な幻想、仙人や妖怪、精霊などの非人間と人間の付き合いを描いており、その奇想天外の想像力が絶賛されている。例えば、魯迅は『中国小説史略』で『聊齋志異』について「描写は詳しく、語り口は井然としており、伝奇小説の方法に拠つて怪を志し、変幻の状たるや目前に在るがごとくである。かとおもうとまた、がらつと調子を変えて、怪とは別に、奇人の異行を叙し、幻域から出てたちまち人間界にとび移る。ままた些細な伝聞を述べているが、これまた多くは簡潔である。おかげで読者は耳目を一新されるのだ」と述べ、この作品には近代小説につながるリアリズムが見られると高く評価しているのである<sup>3)</sup>。

田中貢太郎は『聊齋志異』における35篇の作品を翻訳したが、本論では、第1から第10篇、「考城隍」、「瞳人語」、「種梨」、「嬌娜」、「成仙」、「王成」、「陸判」、「嬰甯」、「酒友」、「蓮香」を中心に分析を行う。

## 一 田中貢太郎と中国怪談の翻訳

田中貢太郎が最初に本格的に中国怪談の翻訳に取り組んだのは大正10年（1921）5月に刊行された『恋愛鬼話』（天祐社）であった。その後、田中貢太郎は続々と中国怪談の翻訳を行っていく。『女国』（東光閣、大正13年（1924））や『蛇精』（改造社、大正15年（1926））といった、中国の怪談のアンソロジーから、『剪灯新話』（新潮社、大正15年（1926））や『聊齋志異』（支那文学大観刊行会、大正15年（1926））といった小説集の翻訳まで次々と發表している<sup>4)</sup>。彼が訳した『聊齋志異』は『支那文学大観』（支那文学大観刊行会、大正15年（1926）3月-昭和2年（1927）4月）の第十二巻として刊行され、35篇の作品を含んでおり、訳文の後に漢文学者である公田連太郎注付きの中国語原文が付けられている。

高西成介は「田中貢太郎と中国の怪談」<sup>5)</sup>において、中国志怪伝奇小説の特徴は簡潔な表現にあり、「多くの説明を弄するのではなく、単刀直入に話の核心へと読み手を導く。余分な説明はそぎ落とされているのである。怪異が起こるのも突然であり、怪異の起こる理由、状況には無関心である」と指摘した上で、田中貢太郎訳『聊齋志異』は比較的原文に忠実な翻訳であると述べている。

一方、田中貢太郎訳を検討する前に、柴田天馬訳とのつながりについて述べなければならない。柴田天馬（本名柴田一郎、1872-1963）は、現鹿児島市生まれの中国文学研究者及び翻訳者である。彼が訳し

1) 高西成介「田中貢太郎と中国の怪談」、『アジア遊学』（105）、勉誠出版、2007年12月

2) 井波律子「幸田露伴と近代化」、『Leaders of Modernization in East Asia』、1997年3月を参考。

3) 常石茂識「あとがき」、『中国古典文学大系』第41巻「聊齋志異（下）」、平凡社、1971年

4) 高西成介「田中貢太郎と中国の怪談」、『アジア遊学』（105）、勉誠出版、2007年12月

5) 高西成介「田中貢太郎と中国の怪談」、『アジア遊学』（105）、勉誠出版、2007年12月

た全10巻の『聊齋志異』は1951年から翌年に創元社によって刊行され、『聊齋志異』の世界初の全訳となり、その個性的な翻訳で知られている。実に柴田天馬が『聊齋志異』の翻訳を始めたのはそれより30年以上前からであり、1919年に34篇の作品をまとめて『和訳聊齋志異』（玄文社）という一冊を出したことがある。

柴田天馬は自身の翻訳文体を「正訳」と呼び、「正訳というと何か改まった感じがしますが、要は原文を殆ど増減せずに、振仮名の効果を極度に利用し、できるだけ漢音を避け、直訳と意識を兼ねた平易な文章にしたものであります」<sup>6)</sup>と述べている。

郡司祐弥は「柴田天馬『聊齋志異』翻訳文体としての「正訳」の変遷とその特徴」（『言語社会:Gensha』13、2019年3月）において、柴田天馬の正訳の特徴を以下のようにまとめている。

- ①原文の漢字をそのまま用いて原文に忠実に文字数を増減しないように心がける。
- ②漢音（※音読みのこと）を避けて通俗平易な和訓の振仮名（と送り仮名）を当てる。
- ③原文の直訳と和訓の意識を同時に成立させる。
- ④総振仮名である。

また郡司氏は田中貢太郎訳の特徴についても言及しており、田中訳の多くは天馬訳を下地にしておりと述べた上で、田中訳には同時に公田連太郎の訓点付き原文が収録されており、かつ振仮名が振られた語もあるが、原文漢字はもとより助字などを残すという理念に立脚しているわけではないと、二人の訳し方の違いを指摘した。

郡司氏によって、田中貢太郎の翻訳理念は柴田天馬と異なるが、当時天馬訳を参照したことが分かった。そこで本論文で柴田天馬訳も比較対象として取り上げる。田中訳と公田注付き原文の引用は『支那文学大観』（支那文学大観刊行会、1926年）所収の本文に拠る。柴田天馬訳は『和訳聊齋志異』（玄文社、1919年）に拠り、これに含まない作品は創元社刊行の全訳『聊齋志異』（1951-1952）を参照する<sup>7)</sup>。引用の際、旧字体を適宜新字体に改めた。

## 二 田中貢太郎訳『聊齋志異』と原文の比較

次に中国語原文における固有の言葉、オノマトペ、「しばらく・暫く」と訳された時間詞という3つの面から考察していきたい。

### 1 中国語原文における固有の言葉

中国語原文における固有の言葉は主に3種類、官名、科挙に関する言葉及び典拠が見られる。

6) 柴田天馬訳『聊齋志異』第1巻「嫦娥之巻」、創元社、1951年

7) 創元社に刊行された全訳の『聊齋志異』は田中貢太郎訳の後であるが、柴田天馬の翻訳態度がほぼ変わっていないため、比較対象になれると思われる。

## ① 官名について

例えば「嬌娜」において、「司李」、「直指」という2つの官名が出てくる。

公田連太郎注付き「嬌娜」

後生舉進士。授延安司李<sup>(五四)</sup>。攜家之任。母以道遠。不<sub>レ</sub>行。松娘舉一男。名小宦。生以<sub>レ</sub>忤直指<sup>(五五)</sup>罷<sub>レ</sub>官。

注(五四) 延安司李。延安は府の名。司李は司理と同じ。刑獄を治むる官。

(五五) 直指は直指使者。朝廷より差遣せられ地方を巡察する官。

柴田天馬訳「嬌娜」

後ち孔は進士に挙げられ、延安の司李<sup>(十六)</sup>になったので、携家<sup>うちじゅう</sup>で赴任することにきめたが、母<sup>はは</sup>おやだけは道が遠いからと行って行かなかった。

赴任後松娘は男の子をうんで名を小宦<sup>なまえ しょうかん</sup>とつけた。

孔は直指<sup>(十七)</sup>に忤<sup>や</sup>って官を罷められた(後略)

注(十六) 亦司理とも書く、広雅に阜陶李官と為り刑獄を治すとある。

(十七) 明では御史を清初では巡按を直指と称した。

田中貢太郎訳「嬌娜」

その後孔生は進士に挙げられて、延安府の刑獄をつかさどる司理の官になったので、一家をあげて任地に往くことになったが、母は道が遠いので往かなかった。

松娘は任地で一人の男の子を生んだので、小宦と云う名をつけた。孔生は朝廷から差遣せられて地方を巡察する直指<sup>さから</sup>に忤<sup>や</sup>うたがために官を罷められた(後略)

柴田天馬は「司李」と「直指」の漢字をそのままにし、それぞれ「さいばんかん」、「じゅんあん」というルビ及び注釈を付けている。彼はこの2つの官名を裁判官、巡按として捉えていることが分かる。

田中貢太郎は「司李」を「司理の官」に訳し、その前に「刑獄をつかさどる」という官職の職務に対する説明の文を付け加えている。そして「直指」の漢字をそのままに用い、前に「朝廷から差遣せられて地方を巡察する」という説明の役割を果たす内容を入れた。「延安府」、「刑獄」、「朝廷」、「差遣」、「巡察」などの言葉遣いをういたのは明らかに公田連太郎注の影響を受けたことが見受けられる。

## ② 科挙に関する言葉

「考城隍」に「邑廩生」という言葉が出てくる。

公田連太郎注付き「考城隍」

予姊丈之祖。宋公。諱燾。邑廩生<sup>(一)</sup>。

注(一) 邑廩生は邑より廩禄を給する生員、邑の給費生なり。

柴田天馬訳「考城隍」

予じぶんの姉夫あねむこの祖おほぢの宋公そうこうは諱いみなを壽じゆとけんいってかんびせい邑けんの廩生かんびせい<sup>(一)</sup>であった。

注（一）廩生というのは府、州、県の入学試験即ち童試に合格した生員中の優等生で、廩米を給せらるるものごとである、生員で無ければ科挙に応ずる資格は無いのである。

田中貢太郎訳「考城隍」

予わたし（聊齋志異の著者、蒲松齡）の姉の夫の祖父に宋公、諱を燾と云った者があった。それは村の給費生であった（後略）

引用部は「考城隍」の書き出しであり、主人公宋公は「邑廩生」、つまり邑の廩生であることを紹介する。柴田天馬は正訳の理念に基づき、漢字をそのまま用いており、「邑」に「けん」というルビを付け、「廩生」に「かんびせい」というルビ及び注釈を付けている。

「邑」は中国古代の行政区画であり、県のことを指す。ただし、原作における県は日本における県と一致しない。『聊齋志異』が書かれた清朝は、主な行政区画は省——府——県及び省——直隸州——県、という3層の行政区画から成り、村は県の下に置かれた行政区画の中で最小の単位である。それに対して、田中貢太郎が『聊齋志異』を訳した当時の日本は府県制<sup>8)</sup>であり、中国における「邑（県）」は第3層の行政区画であり、日本における町村に近い<sup>9)</sup>。また、『宮崎市定全集15 科挙』<sup>10)</sup>によると、中国の清代に地方学校の代表的なものとして府学、州学、県学があり、府州県学の在學生を生員と言ひ、「廩生」は政府から若干の学資を給せられる優れた生員である。

引用部によって柴田天馬と公田連太郎共に「邑」を「県」として捉えていることが見られ、二人の訳は正確でないと見えよう。それに対して、田中貢太郎は「村の給費生」と訳している。「廩生」を「給費生」にしたのは公田連太郎注の影響を受けたと考えられ、田中貢太郎は公田連太郎注を参考した上で、より正しい訳をしたことが見受けられる。

また、「陸判」に「禮闈」という言葉がある。

公田連太郎注付き「陸判」

朱三入ニ禮闈ニ<sup>(六一)</sup>。皆以ニ場規ニ被レ放ニ<sup>(六二)</sup>。

注（六一）禮闈。禮部の試。各省の挙人即ち郷試の及第者を京師に集めて挙行する試験なり。其事、禮部に掌らるるを以て斯く云う。

（六二）以場規被放。試験場の規則に合わざるを以て試験を受くるを得ざりしなり。

8) 総務省「地方自治制度の歴史」、[https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/bunken/history.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/bunken/history.html) を参照。

9) 財団法人自治体国際化協会（編）『中国の地方行財政制度』、2007年を参照。

10) 岩波書店、2000年

柴田天馬訳「陸判」

其後朱は三度禮闈<sup>(一)</sup>に<sup>おう</sup>応じたけれどもいつも規則に合<sup>きそく</sup>ないで受<sup>あわ</sup>験が出来<sup>じゆけん</sup>なかった(後略)

注(十二) 郷試の及第者其他の有資格者に対する試験を会試とい<sup>れいぶ</sup>禮部で試<sup>しこう</sup>行するから禮闈ともい<sup>れい</sup>うのである。

田中貢太郎訳「陸判」

朱は後に三たび禮闈に<sup>お</sup>応じたが、試験場の規則に合<sup>あ</sup>わなかったので試験を受けることができな<sup>あ</sup>かった。禮闈とは禮部の試の<sup>こ</sup>ことで、各省の<sup>あ</sup>挙人、即ち郷試の及第者を京師に集めて<sup>あ</sup>挙行する所謂科<sup>あ</sup>挙の<sup>こ</sup>ことであるが、それは禮闈で掌<sup>あ</sup>っているから禮闈と云<sup>あ</sup>うのであ<sup>あ</sup>った。

『宮崎市定全集15 科挙』<sup>11)</sup>によると、「禮闈」は礼部が担当する科挙試験第二段の試験、会試の雅名である。柴田天馬は「禮闈」の漢字をそのまま使<sup>あ</sup>い、「れいぶしけん」(礼部試験)というルビと注釈を付<sup>あ</sup>けている。

田中貢太郎も「禮闈」の漢字を用<sup>あ</sup>いているが、注釈をつけずに、「禮闈とは禮部の試の<sup>こ</sup>ことで、各省の<sup>あ</sup>挙人、即ち郷試の及第者を京師に集めて<sup>あ</sup>挙行する所謂科<sup>あ</sup>挙の<sup>こ</sup>ことであるが、それは禮闈で掌<sup>あ</sup>っているから禮闈と云<sup>あ</sup>うのであ<sup>あ</sup>った」、という説明の文を直接本文に入<sup>あ</sup>れた。この説明は公田連太郎が注釈した文の言葉遣いとほぼ変わ<sup>あ</sup>っておらず、田中貢太郎は公田連太郎注を参考したことは明らかである。

③ 典拠について

「成仙」には友情に関わる典拠が見られる。

公田連太郎注付き「成仙」:

文登<sup>(一)</sup>周生。與<sup>せいせい</sup>成生<sup>が</sup>共<sup>く</sup>筆<sup>ゆう</sup>研<sup>(二)</sup>。遂<sup>(三)</sup>訂<sup>な</sup>爲<sup>な</sup>杵<sup>な</sup>臼<sup>な</sup>交<sup>(三)</sup>。

注(一) 文登は山東省膠東道の県の名。

(二) 共筆研は学友なるをいう。研は硯と通ず。

(三) 杵臼交は親密なる交際をいう。後漢書に、「公沙穆来りて太学に遊ぶ。資糧無し。乃ち服を<sup>あ</sup>変じて客雇し、呉祐の<sup>あ</sup>ために賃<sup>あ</sup>春す。祐興に<sup>あ</sup>語り、大に驚き、遂に<sup>あ</sup>共に交を杵臼の<sup>あ</sup>間に訂す」とあるに本づく。

柴田天馬訳「成仙」

文登の周生は少<sup>せいせい</sup>い時<sup>が</sup>から成<sup>く</sup>生<sup>ゆう</sup>と共<sup>(一)</sup>筆<sup>な</sup>硯<sup>な</sup>で杵<sup>な</sup>臼<sup>な</sup>交<sup>(一)</sup>であ<sup>あ</sup>った(後略)

注(一) 公沙穆が<sup>こ</sup>大学に居<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>ころ資糧<sup>ひと</sup>が<sup>な</sup>無<sup>な</sup>かつたので、服<sup>な</sup>を<sup>あ</sup>変<sup>あ</sup>じて<sup>あ</sup>呉祐<sup>な</sup>とい<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>人<sup>な</sup>の<sup>あ</sup>為<sup>あ</sup>めに賃<sup>あ</sup>白<sup>な</sup>をや<sup>あ</sup>って<sup>あ</sup>居<sup>あ</sup>た、所<sup>あ</sup>が<sup>あ</sup>祐<sup>な</sup>が色<sup>あ</sup>々<sup>あ</sup>話<sup>あ</sup>して<sup>あ</sup>見<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>大<sup>あ</sup>変<sup>あ</sup>驚<sup>あ</sup>き<sup>あ</sup>遂<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>杵<sup>あ</sup>臼<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>間<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>交<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>訂<sup>あ</sup>んだ<sup>あ</sup>とい<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>こ<sup>あ</sup>とが<sup>あ</sup>後漢書<sup>あ</sup>に出<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>居<sup>あ</sup>る。

11) 岩波書店、2000年

12) 流布本である青柯亭刻本に「研」は「硯」である。

### 田中貢太郎訳「成仙」

文登の周生は成生ちいさと少い時から学問を共にしたので、ちょうど後漢の公沙穆こうさぼくと呉祐ごゆうとが米を搗く所で知己ちいきになって、後世から杵臼ききゆうの交と云われたような親しい仲であった（後略）

「成仙」の原文には「杵臼交」という言葉を用いて主人公周生と成生の友情を描いている。『後漢書・卷六四・呉祐伝』によると、後漢の公孫穆は学費がなかったので呉祐の家に雇われて米つきをしていたが、呉祐がその学識に驚いて親交を結んだという故事が典拠であり、後に身分や貧富を超えた交友という意味で使われている<sup>13)</sup>。

柴田天馬は「共筆硯」と「杵臼交」の漢字をそのまま保留して注釈とルビを付けている。ただし、そのルビは音読でもなく訓読でもなく、「がくゆうでほしいなか」（学友で親しい仲）という言い換えである。

それに対して田中貢太郎はこの典拠に関する解釈を本文に取り入れ、「ちょうど後漢の公沙穆と呉祐とが米を搗く所で知己になって、後世から杵臼の交と云われたような親しい仲」と訳している。田中貢太郎訳35篇の作品には注釈が一つも付けられておらず、彼は可能な限り原文に含んでいる要素を工夫して本文に入れようとしていることが分かる。

## 2 オノマトペの訳し方

田中貢太郎は『聊齋志異』を翻訳した際にオノマトペ (onomatopée) を多く用いている。オノマトペの語源はフランス語であり、日本語では一般的に擬音語と擬態語をまとめた言葉として扱われている<sup>14)</sup>。「擬声語」という名称も広く使われてきた経緯があり、名称に揺れが見られたが、近年では、擬音語・擬態語の総称として「オノマトペ」という名称が広まりつつあり、実際の音声を表すのを擬音語、物事の様子や状態を表すものを擬態語と呼ばれている。本論文でも擬音語と擬態語をオノマトペと総称して用いることとする。

田中貢太郎訳に出てくるオノマトペの中には、中国語原文にあるものと、原文にはなく田中貢太郎が付け加えたものが含まれている。更に、中国語原文にあるものは対応する和語のオノマトペに訳されたものと、和語のオノマトペに訳されていないものに分けることができる。

中国語原文にあるオノマトペとして、表1の12個が挙げられる。

13) 『漢語大詞典』第四卷、p855、世紀出版集団・漢語大詞典出版社、2003年を参照。

14) 中里理子『オノマトペの語義変化研究』、勉誠出版、2017年を参照。

表 1

	中国語 オノマトペ	公田連太郎注付き原文 (作品名)	柴田天馬訳	田中貢太郎訳
①	蠕蠕	漸覺 <sub>二</sub> 兩鼻中。蠕蠕 <sup>(二四)</sup> 作 <sub>レ</sub> 癢似 <sub>二</sub> 有 <sub>レ</sub> 物出。離 <sub>レ</sub> 孔而去 <sub>一</sub> 。 注(二四) 蠕蠕作癢。むずむずと癢きこと。 (「瞳人語」)	両 <sup>りょうほう</sup> 方 <sup>ほな</sup> の鼻 <sup>なか</sup> の中 <sup>むずへ</sup> が蠕 <sup>かゆ</sup> 々 <sup>かゆ</sup> 癢 <sup>かゆ</sup> くな <sup>かゆ</sup> ったかと思 <sup>おも</sup> うと有 <sup>な</sup> 物 <sup>に</sup> 孔 <sup>や</sup> から出 <sup>あ</sup> て去 <sup>い</sup> ったようであ <sup>あ</sup> った(後略)	すると両方の鼻の孔の中がむずむず癢(ママ)くなって、物がいて出て行くようであった(後略)
②	營營	營營 <sup>(二七)</sup> 然竟出門去。 注(二七) 營營然は往來する貌。詩經に「營營たる青蠅」とあり。 (「瞳人語」)	窸々 <sup>ちら</sup> 然門を出て(後略)	それがちよろちよろと門の方へ出て行って(後略)
③	徐徐	徐徐按 <sub>二</sub> 下之 <sub>一</sub> 。(「嬌娜」)	徐々 <sup>しずか</sup> にそれを按 <sup>おさ</sup> 下 <sup>え</sup> る(後略)	そろそろと押しつけるように揉んでいる(後略)
④	淙淙	不 <sub>レ</sub> 意淙淙 <sup>(二五)</sup> 徹 <sub>レ</sub> 暮。 注(二五) 淙淙は、ざあざあと雨の降る音。 (「王成」)	雨 <sup>あめ</sup> は淙 <sup>ざあ</sup> 々と暮 <sup>く</sup> れ方 <sup>がた</sup> まで降 <sup>ふ</sup> り(後略)	雨はますます強くざあざあと降りだして夜になってもやまなかった。
⑤	灼灼	個兒郎 <sup>(七)</sup> 。目灼灼似 <sub>レ</sub> 賊。 注(七) 兒郎は青年をいう。 (「嬰寧」)	個 <sup>こ</sup> の兒郎 <sup>ひと</sup> の目 <sup>め</sup> は灼 <sup>ぎよ</sup> 々 <sup>ろ</sup> して似 <sup>に</sup> 賊 <sup>どろぼう</sup> みたいネ。	この人の眼は、ぎよろぎよろして、盗賊みたいね。
⑥	茸茸	摸 <sub>レ</sub> 之 <sup>(三)</sup> 。則茸茸 <sup>(四)</sup> 有 <sub>レ</sub> 物。 注(三) 摸は手探りすること。 (四) 茸茸は草又は毛などの密生する貌。 (「酒友」)	摸 <sup>さぐ</sup> つてみたら、茸 <sup>も</sup> 々 <sup>じゃ</sup> <sup>(三)</sup> した物がいた。 注(三) 茸々は細草の茂ったかたち、ここでは毛の生えていることである。	手をやって摸 <sup>な</sup> でてみると、毛がもじゃもじゃと触 <sup>ふ</sup> わった。
⑦	丁丁	已乃以 <sub>レ</sub> 鑊伐 <sub>レ</sub> 樹 <sub>二</sub> 丁丁 <sup>(一六)</sup> 。良久乃斷。 注(六) 丁丁は木を伐る声。音サウサウ。 (「種梨」)	已 <sup>する</sup> 乃 <sup>どうし</sup> と道士 <sup>すき</sup> は鑊 <sup>き</sup> で樹 <sup>き</sup> を伐 <sup>き</sup> りはじめ、丁 <sup>とん</sup> 々 <sup>や</sup> 良久 <sup>ひさ</sup> しくや <sup>い</sup> って居 <sup>い</sup> たが、乃 <sup>き</sup> 断 <sup>た</sup> るので(後略)	すると道士は鋤を以て樹を伐りはじめ、しばらく丁丁とやっていたが、やがて断れたので(後略)
⑧	冉冉	朱忽冉冉 <sup>(六七)</sup> 自 <sub>レ</sub> 外至。 注(六七) 冉冉は行く貌。 (「陸判」)	朱 <sup>しゅ</sup> が外 <sup>そと</sup> から冉 <sup>ふら</sup> 々 <sup>ら</sup> や <sup>き</sup> って来 <sup>き</sup> た。	朱が冉冉として外から入って来た。
⑨	依依	朱依依 <sup>(六八)</sup> 慰 <sub>レ</sub> 解之 <sub>一</sub> 。 注(六八) 依依は舍つるに忍びざる貌。 (「陸判」)	朱 <sup>しゅ</sup> は依 <sup>い</sup> 々 <sup>ら</sup> と夫 <sup>ふ</sup> 人 <sup>じん</sup> を慰 <sup>なぐさ</sup> めた(後略)	朱は依依として慰めた。
⑩	怏怏	生拾 <sub>レ</sub> 花悵然。神魂喪失。怏怏遂返。(「嬰寧」)	生 <sup>せい</sup> は花 <sup>はな</sup> を拾 <sup>ひろ</sup> ったが、悵 <sup>がっかり</sup> 然 <sup>たましい</sup> と神魂 <sup>たましい</sup> の喪 <sup>なげ</sup> 失 <sup>け</sup> た人 <sup>ひと</sup> のようにな <sup>な</sup> って怏 <sup>かえ</sup> 々 <sup>かえ</sup> と返 <sup>かえ</sup> ったのであ <sup>あ</sup> った。	王はその花を拾ったが悲しくて泣きたいような気になって立っていた。そして魂のぬけた人のようになって怏怏として帰った(後略)
⑪	離離	荒草離離。(「蓮香」)	荒草 <sup>くさがしげ</sup> 離 <sup>い</sup> 々 <sup>げ</sup> と(後略)	春草が離離と生えて(後略)
⑫	格格	格格作響。(「嬌娜」)	格格 <sup>ごろごろ</sup> と響 <sup>おと</sup> をたてていたが(後略)	かくかくと云う響をさした。

表1における①から⑥は対応する和語のオノマトペに訳されたオノマトペの例である。『漢語大詞典』によって、意味は以下の通りである<sup>15)</sup>。

- ①蠕蠕：虫の行くさま。うごめくさま。
- ②營營：往来の頻繁なさま。
- ③徐徐：そろそろ。静かに。ゆるやか。
- ④淙淙：水の流れるさま。水の流れる音。
- ⑤灼灼：明かなさま。光りかがやくさま。
- ⑥茸茸：草の盛に茂ったさま。

上記表1が示すように、田中貢太郎はこの6つのオノマトペを対応する和語のオノマトペ、「むずむず」、「ちょろちょろ」、「そろそろ」、「ざあざあ」、「ぎよろぎよろ」、「もじゃもじゃ」に翻訳した。柴田天馬は中国語原文の漢字をそのまま使い、③「徐徐」以外のルビは田中貢太郎と一致している。二人の訳ともに適切であると言える。

また⑦から⑫は和語のオノマトペに訳されていない言葉である。『漢語大詞典』による解釈は以下の通りである。

- ⑦丁丁：「丁」は釘に通ず。木を伐る声。
- ⑧冉冉：行くさま。進むさま。
- ⑨依依：離れるに忍びない意。思い慕うさま。
- ⑩怏怏：不満で楽しまぬさま。不快に感ずるさま。
- ⑪離離：草木花実等の繁茂しているさま。
- ⑫格格：鳥の鳴く声のさま。

柴田天馬訳は中国語原文の漢字を用い、ルビを振っているが、オノマトペに訳していない言葉が見られる。例えば、⑩「怏怏」を「つまらなく」に、⑪「離離」を「しげ（茂る）」にしている。

田中貢太郎は中国語オノマトペの漢字をそのまま残し、特に⑧「冉冉」、⑨「依依」、⑪「離離」という3つの言葉はルビも付けておらず、後ろに「と」或いは「として」を加えることによって様子や有り様を表す語であることを示している。また⑫「格格」は「かくかく」に翻訳されているが、日本語における「かくかく」と表記した言葉の中で音を表すオノマトペが見つからないので、原文「格格」の音読みであると考えられ、ここでは訳されていない一例として扱う。

次に原文になく田中貢太郎が付け加えたオノマトペの例を見てみよう。

---

15) 複数の意味がある場合は作品に使われている意味のみ取り上げる。以下同じ。

表 2

	日本語 オノマトペ	公田連太郎注付き原文 (作品名)	柴田天馬訳	田中貢太郎訳
⑬	ひらひら	俄題紙 <sup>(一〇)</sup> 飛下。 注(一〇): 題紙は題を書きたる紙。 (「考城隍」)	と、俄、題をした、めた紙が飛下された。	と、俄に試験の題を書いた紙がひらひらと飛んで来た。
⑭	そろそろ	按令 <sub>二</sub> 旋轉 <sub>一</sub> 。(「嬌娜」)	なでまわ 按令旋轉した。	そろそろと撫でまわさした(後略)
⑮	ばらばら	未 <sub>レ</sub> 幾雪毛摧落。(「王成」)	しばらくゆき 未幾すると雪のような毛が摧落ちて(後略)	間もなく雪のような毛がばらばらに落ちて(後略)
⑯	ぐうぐう	燭 <sub>レ</sub> 之狐也。酣醉而犬卧 <sup>(五)</sup> 。 注(五) 犬卧は犬の如く卧する也。 (「酒友」)	あかり 燭をつけてみると、狐が酣酔つて犬のように卧っていた。	火を点つけてみると狐であったが、ひどく酔ばらったと見えてぐうぐうと眠っていた。

二重線部は田中貢太郎が付け加えたオノマトペである。⑬は「考城隍」における冥界の神が主人公の宋公に試験問題の紙を渡す場面である。怪異小説であり、試験問題が書いている紙は手渡しではなく、飛んでくるのである。柴田天馬は「飛下」という原文の漢字をそのままにし、「わた(す)」「渡す」というルビを付けている。

田中貢太郎は飛ぶという動詞の前に、鳥や蝶など、また紙・布・葉など薄いものが空中にひるがえるさまを表す<sup>16)</sup>、「ひらひら」というオノマトペを付け加えた。実際に引用部で「ひらひら」を使わずに「試験の題を書いた紙が飛んできた」というように表現することもできるが、オノマトペを使うことによって、紙が飛んでいる様子をイメージすることが可能になる。

⑭から⑯も⑬と類似の例であり、柴田天馬は原文以上のものを使っていないが、田中貢太郎は動作の前に「そろそろ」、「ばらばら」、「ぐうぐう」という修飾語としてのオノマトペを付け加えている。

オノマトペの効果に関して、笈寿雄・田守育啓(1993)は、一般語彙は記憶に残りにくい、オノマトペというものは具体的かつ臨場感を持って出来事全体をイメージで伝えることが出来、記憶に残りやすいと指摘する<sup>17)</sup>。

前記⑬の引用部では「ひらひら」という語を用い、怪異小説の不思議さ、奇妙さ、また神秘感が浮かび上がると考えられる。また⑭から⑯もオノマトペを加えたことによって、原作の場面がより生き生きと再現され、一般読者の目も引かれると推測できる。

### 3 「しばらく・暫く」と訳された時間詞について

田中貢太郎訳『聊齋志異』には「しばらく・暫く」という副詞が多く見られ、これが中国語原文に類似した意味を表す時間詞が数多くあること、及び「しばらく・暫く」という言葉の特徴につながっていると考えられ、これから詳しく考察する。

本論文の研究対象となる10篇の作品において、「しばらく・暫く」と訳された言葉として以下の10個が

16) 『日本国語大辞典第二版』第十一巻、小学館、2004年

17) 笈寿雄、田守育啓編『オノマトピア—擬音・擬態語の樂園』、勁草書房、1993年を参考。

挙げられる。

表 3

	中国語 時間詞	公田連太郎注付き原文 (作品名)	柴田天馬訳	田中貢太郎訳
①	移時	移 <sub>レ</sub> 時。入 <sub>二</sub> 府廨 <sub>一</sub> 。(六)。 注(六) 府廨は官署なり。 (「考城隍」)	やがて府廨 <sup>やくしよ</sup> に入ってゆくと(後略)	しばらくして宋公は、唯とある役所へいった。
		移 <sub>レ</sub> 時復甦。張 <sub>レ</sub> 目四顧。 (「蓮香」)	しばらくいきかえ移 <sub>レ</sub> 時して甦 <sup>いきかえ</sup> り、目を張 <sup>みまわ</sup> いて四顧す(後略)	暫くして生きかえって四辺を見た。
②	有頃	有 <sub>レ</sub> 頃。開視。豁見 <sub>二</sub> 凡 <sup>18)</sup> 物 <sub>一</sub> 。 (「瞳人語」)	しばらくして目を開くと凡 <sup>めひら</sup> の上の物 <sup>つくえうえもの</sup> が豁 <sup>はつき</sup> り見える。	しばらくして目を開けて見ると凡 <sup>つくえ</sup> の上の物がはっきり見えた。
③	少頃	少頃。一婢入。 (「嬌娜」)	しばらくして一の婢 <sup>ひとりこしもと</sup> が入ってきた。	しばらくして一人の侍女が入って来た(後略)
		少頃使 <sub>二</sub> 來拜識 <sub>一</sub> 。 (「嬰寧」)	いまにあわせ少頃 <sup>ひたりこしもと</sup> 或拜識 <sup>おとせ</sup> しましょう。	今、すぐ此所へ来させて逢わせるがね。
④	少間	少間。引 <sub>レ</sub> 妹來視 <sub>レ</sub> 生。 (「嬌娜」)	しばらくすると妹をつれて来て孔にあわせた。	しばらくして公子は嬌娜を伴れて来て孔生を見せた。
⑤	頃之	頃 <sub>レ</sub> 之。王出御 <sub>レ</sub> 殿。 (「王成」)	しばらくして頃 <sup>おとう</sup> 之 <sup>ごてん</sup> て、王が御殿 <sup>ごてん</sup> に出られる(後略)	暫くして王が御殿に出る(後略)
⑥	少時	少時。會 <sub>二</sub> 母所 <sub>一</sub> 。 (「嬰寧」)	しばらくしておつか <sup>おつか</sup> さんの所 <sup>ところ</sup> で会った。	暫くして王と女は、老婆の所で逢った。
⑦	久之	久 <sub>レ</sub> 之曰。至矣。啓 <sub>レ</sub> 目。果見 <sub>二</sub> 故里 <sub>一</sub> 。 (「嬌娜」)	しばらくしてから公子が、 「至矣 <sup>きました</sup> 」 といたので目を啓くと、果して故里 <sup>ふるさと</sup> が見えて居た。	しばらくして公子の、 「もう来たのですよ、」 と云う声を聞いて目を啓けた。果して孔生の故郷の村であった。
		呉詢得 <sub>レ</sub> 故。惘然久 <sub>レ</sub> 之。 (「嬰寧」)	こ <sup>ご</sup> わけ <sup>わけ</sup> たず <sup>たず</sup> ねし <sup>ねし</sup> しばらく <sup>しばらく</sup> は <sup>は</sup> 理由 <sup>りゆう</sup> を <sup>を</sup> 聞いて <sup>いて</sup> 暫く <sup>しばらく</sup> ぼんやり <sup>ぼんやり</sup> して居た(後略)	呉は理由を聞いて暫くぼんやりしていた(後略)
⑧	良久	弟錯愕良久。 (「成仙」)	おとうと <sup>おとうと</sup> あに <sup>あに</sup> ほな <sup>ほな</sup> 話を <sup>を</sup> 聞いて <sup>いて</sup> 良久 <sup>き</sup> しく <sup>き</sup> 錯愕 <sup>さくおつ</sup> たのであった(後略)	弟はびっくりして暫くは眼をみはっていた。
		婢應去。良久聞 <sub>二</sub> 戶外隱有 <sub>二</sub> 笑聲 <sub>一</sub> 。 (「嬰寧」)	こしもと <sup>こしもと</sup> へんじ <sup>へんじ</sup> が <sup>が</sup> 應 <sup>おこ</sup> して <sup>いて</sup> 去 <sup>って</sup> から良久 <sup>き</sup> しく <sup>き</sup> すると <sup>と</sup> 戸 <sup>と</sup> の外 <sup>そと</sup> で <sup>で</sup> 隠 <sup>かく</sup> かに <sup>かに</sup> 笑 <sup>わら</sup> う <sup>う</sup> 声 <sup>こえ</sup> がした。	婢が出て往ってからやや暫くして、戸外でひそかに笑う声が出た。
		女俯思良久曰。 (「嬰寧」)	むすめ <sup>むすめ</sup> うつ <sup>うつ</sup> しばらく <sup>しばらく</sup> し <sup>し</sup> あん <sup>あん</sup> を <sup>を</sup> 考 <sup>かん</sup> えて <sup>いて</sup> 居 <sup>い</sup> た(後略)	嬰寧は俯向いて考えこんでいたが、暫くして云った。
⑨	辰後	辰後。成往訪 <sub>レ</sub> 周。 (「成仙」)	せいせい <sup>せいせい</sup> とき <sup>とき</sup> す <sup>す</sup> ふた <sup>ふた</sup> しゅ <sup>しゅ</sup> たず <sup>たず</sup> 成 <sup>せい</sup> 生 <sup>せい</sup> は <sup>は</sup> 時 <sup>とき</sup> 過 <sup>か</sup> ぎ <sup>ぎ</sup> て <sup>て</sup> 再 <sup>また</sup> び <sup>び</sup> 周 <sup>しゅう</sup> を <sup>を</sup> 尋 <sup>たず</sup> ね <sup>ね</sup> (後略)	周が家を出てから暫くして成は周の家へ往った。
⑩	暫	因暫休 <sub>二</sub> 旅舍 <sub>一</sub> 。 (「王成」)	しばらく <sup>しばらく</sup> やど <sup>やど</sup> や <sup>や</sup> やす <sup>やす</sup> 暫 <sup>しばらく</sup> く <sup>く</sup> 旅 <sup>りょ</sup> 舎 <sup>しゃ</sup> で <sup>で</sup> 休 <sup>やす</sup> んで <sup>いて</sup> 居 <sup>い</sup> た。	暫く休むつもりで旅館へ入った(後略)

18) 流布本である青柯亭刻本に「凡」は「几」である。

『日本国語大辞典』<sup>19)</sup>によると「しばらく・暫く」は以下の4つの意味を表す。

- i 少しの間。一時。ちょっと。
- ii (その状態が一時的なものとして) 仮に。かりそめに。一応。当分の間。
- iii 久しく。少し長い間。
- iv つぎの行動や考察を一時対象外とすることを表す。ひとまず。当分。当面。

このように「しばらく・暫く」は短い時間と少し長い時間の両方を表現することができる。『漢語大詞典』<sup>20)</sup>によって、①「移時」、②「有頃」、③「少頃」、④「少間」、⑤「頃之」、⑥「少時」という6つの言葉はいずれも短い時間を表し、iの解釈に当てはまる。⑦「久之」と⑧「良久」はやや長い時間を表現し、iiiに対応している。⑩「暫」はiiの意味である。ただし、⑨「辰後」における「辰」は「晨」に通じ、朝のことを指すので、「暫く」に訳したのは正確な訳でないと言える。

引用部における10個の時間詞を含む15句の例文の中、柴田天馬は11句に「しばらく(ややしばらく)」を使っているが、違う場面に出ている同じ言葉に対して、必ずしも同じ訳し方をするわけではないことが見受けられる。例えば①「移時」を含む2つの例文では、柴田天馬はそれぞれ「やがて」、「しばらく」と訳している。⑧「良久」の3つの例文も訳し方は揃っていない。それに対して、田中貢太郎は類似した意味を表す時間詞に対してほとんど同じ訳をし、均一的であることが窺える。

## おわりに

本論文では、柴田天馬訳と比較しながら、中国語原文における固有の言葉、オノマトペ及び「しばらく・暫く」と訳された時間詞という3つの面から、田中貢太郎訳『聊齋志異』における10篇の作品を分析した。

中国語原文における固有の言葉を翻訳した際に、柴田天馬は基本的に原文の漢字をそのまま用い、ルビと注釈併用の形で提示している。それに対して、田中貢太郎は注釈を一切付けておらず、公田連太郎の注釈を参考した上で、日本人読者に馴染まない言葉に説明の役割を果たしている文を本文に取り入れることが分かった。

また、田中貢太郎訳『聊齋志異』にオノマトペが多く見られる。その中に、中国語原文にあるものと、原文になく彼が加えたものが含まれている。中国語原文にあるオノマトペには対応する和語のオノマトペに訳されたものがあり、中国語の重ね字をそのまま使い、後に「と」或いは「として」を加えることによって様子や有り様を表す語であることを示しているものもある。彼が加えたオノマトペは多く動詞の前に置かれており、原作の場面がより生き生きと再現され、一般読者の目も引かれると言えよう。

そして、田中貢太郎訳では、「しばらく・暫く」という副詞がたくさん用いられる。これが中国語原文

19) 第二版第六巻、小学館、2004年

20) 『漢語大詞典』、世紀出版集団・漢語大詞典出版社、2003年

に類似した意味を表す時間詞が数多くあること、及び「しばらく・暫く」という言葉の特徴につながっていると考えられる。柴田天馬は同じ言葉に対しても違う訳し方をしているが、田中貢太郎は基本的に揃っており、時間詞に対する翻訳は均一的であることを明らかにした。

今後は残った25篇の田中貢太郎訳『聊齋志異』の作品を分析し、全作品にわたる翻訳態度を究明したい。

